

いのちと生き方 「ごんぎつね」を語る(4)

カードや手紙を書いて楽しく学ぼう

これは、わたしが小さいときに、村の茂平（もへい）というおじいさんから聞いたお話です。
昔は、わたしたちの村の近くの中山（なかやま）という所に、小さなおしろがあって、中山様というおとの様がおられたそうです。

その中山から少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓（ひやくしょう）家のうら手につるしてあるとんがらし（とうがらし）をむしり取っていたり、いろんなことをしました。

ごんの自己しょうかいカード

ごんの自己しょうかいカード	
☆名前	
☆年ごろ： 赤ちゃんぎつね こどもぎつね 若者ぎつね 大人ぎつね 年寄りぎつね	
☆住んでいる所	
☆家族	ごんのにがお絵
☆しゅみ	
☆ごんからの ひとこと	

あなたが、ごんから自己しょうかいカードをもらって読んだとしたら、ごんをどう思いますか

「ごんぎつね」は「おじいさんから聞いたお話です。」という客観的な文面で始まります。書き出しの部分を読み取って自己紹介カードにまとめることで、ごんの境遇を整理して明確化します。「ごんからのひとこと」の項は、自分がごんになったつもりで、よびかけるものです。気持ちを探る伏線とも言えます。また「自己紹介カードをもらって読んだとしたら…」では、ごんを客観でとらえます。

ペア学習を取り入れ「ごんの役」と「カードをもらった読み手の役」として、それぞれが書いた自己紹介カードを交換しあうのもアイデアですね。ごん役の相手からもらったカードから、「ごんからの自己しょうかいカードをもらって、ごんをどう思いますか」を書かせてもおもしろいと思います。

カードや手紙は単に書かせるだけでなく、情報や意見交流することで広がりや深まり、コミュニケーション力の向上に役立ちます。例えば、年ごろでは「子どもぎつね」と「若者ぎつね」で意見が分かれるでしょうし、その根拠を本文から導くのもいいですね。住んでいる所も「あな」「森の中のあな」「しだのいっぱいしげった森の中のあな」「山の中の、しだのいっぱいしげった森の中のあな」「中山から少しはなれた山の中の、しだのいっぱいしげった森の中のあな」…色々な紹介の表現が考えられます。詳しく紹介して相手に伝えられるのは…このような点からも、比較検討しながら文の見方や捉え方を学ぶことができます。

また、「ごんからのひとこと」や「カードをもらった感想」も子どもそれぞれ、色々な感じ方や表現の仕方があると思います。カードは形式や活用を工夫することで、より楽しく効果的に学べます。カードや手紙（またはワークシート）の用意が無理な場合は、国語のノートにカードや手紙のつもりで内容を書かせてもいいと思います。

天国のごんに送る子ども達の手紙

ごんぎつねの学習も終盤を迎えるにあたっては、天国のごんに送る手紙を子ども達が書くのも一案です。ここでは、読み取ったことをもとにして、感じたことや考えたことを子ども達が発信する場です。読み取りだけで終わるのではなく、最後は自身への振り返りや発信、情報交換として締めくくるとより高まってくることでしょう。

いのちをイメージしながら読もう

物語の情景の一語やオノマトペ、ストーリーに触れることは、ごんぎつねのいのち観に迫ることでもあります。自身の心情をごんや兵十あるいは南吉の生き方や思想と重ねたり、第三者的に見たり、読みの視点を焦点化したりすることで、いのち観は深まってきます。

さらに、読解して深めたことを「手紙を書く」「音読表現する」活動を通して、活かしたり、伝えたりすることで学びの価値はさらに高まっていきます。加えて、意見交流を図ることで、相乗に広がりや深まり、共有が生まれます。いのちの学びは無限です。

<p>①えらんだ場面（G） クライマックス</p> <p>②その場面が気に入った理由・えらんだ理由</p> <p>・ごんが最後の力をふりしぼってうなづく所と、青いけむりが細くなるのがごん細いいのちみたいで感動したから読みた。</p>	<p>③読みの工夫点</p> <p>ア) 気持ち イ、はやさと聞 ウ、その他</p> <p>例 どんな場面でも、だれの・どんな気持ちや様子を・どのように工夫するか</p> <p>例 特に この場面の こんな点に 気をつけたい</p> <p>「おや？」のくりをみた兵十がびっくりする感じをききつける</p> <p>青いけむりの所はごんが死んでいくような感じでよむ。</p>
--	---